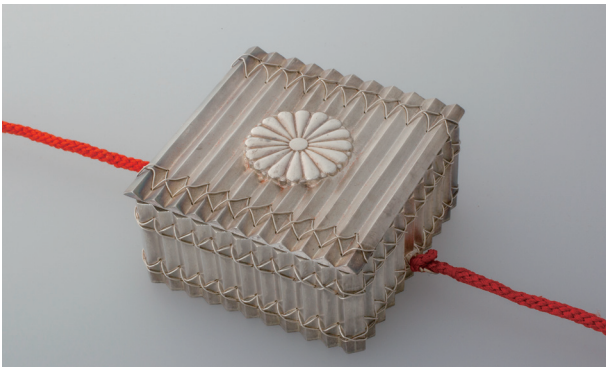
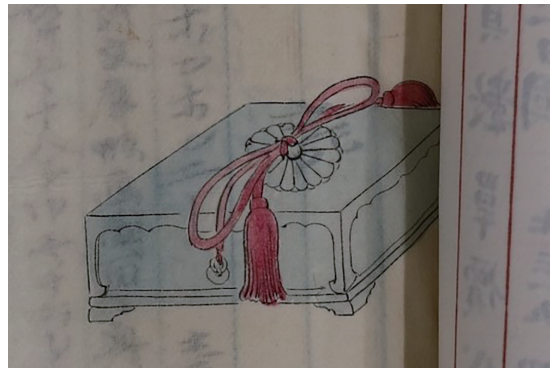




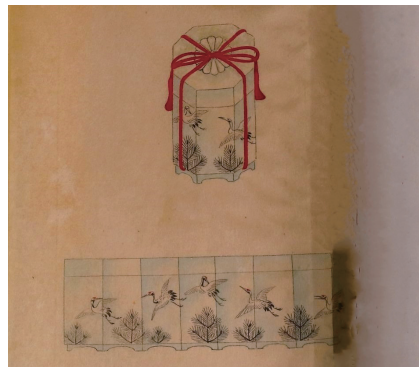
【長佐古 口絵 1】「文庫形金蒔絵唐草文英国王紋章ボンボニエール」  
 (右) 英国王紋章部分拡大 (学習院女子中・高等科所蔵)



【長佐古 口絵 2】  
 (左) 「柳筥形ボンボニエール (天皇家紋)」 (学習院大学史料館蔵 寺内家史料22-8)  
 (右) 「箱形燕文ボンボニエール (宮家共通紋)」 (個人蔵)



【長佐古 口絵 3】  
 (左) 「台付色紙文庫形ボンボニエール (天皇家紋)」 (学習院大学史料館蔵 寺内家史料22-7)  
 (右) 「銀製菓子器」画 (宮内庁宮内公文書館蔵 識別番号839-6)



【長佐古 口絵 4】「御菓子器」  
 (左) 「八角形松鶴文ボンボニエール (宮家共通紋)」 (個人蔵)  
 (右) 「銀製菓子器」画 (宮内庁宮内公文書館蔵 識別番号839-5)

# 宮中晩餐会の歴史的考察 その（五）

## — ガーター勲章奉呈・内親王婚儀・明治の終り —

長佐古美奈子

### はじめに

国賓をもてなす国の最高接遇である宮中晩餐会開催とその開催に至る準備過程から、明治皇室の西欧化推進の中で抗うように展開された国産品の保護奨励の様相を、史料と作品の双方から読み解く論考も今回で五回目を迎えた。今稿では日英同盟からのガーター勲章の奉呈儀式、そして明治の末期を彩った内親王の結婚から「西欧化と国産品の保護奨励」が明治の終りを迎えた時にどのような様相となっていたのかを確認する作業をおこなう。

日清戦争に勝利した日本は列強の一翼に入る。明治三五年（一九〇二）には遂に英国との間に日英同盟を結び、国際的な地位を確立した。日本及び皇室にとつてこれまで「手本」としていた英国王室と同盟を結ぶことは「榮譽」であつたと推察される。<sup>(2)</sup>さらにこの同盟を背景に日露戦争へ進み、勝利することとなった。

ポーツマスで講和会議が始まつた三日後の明治三八年（一九〇五）八月一二日に、ロンドンで第二次日英同盟が締結された。その約二か月後の十月二六日、在英の林董全権公使より小村寿太郎外務大臣へ電信がもたらされた。その内容は英国皇帝より天皇へ「ガーター勲章贈進のため来年早々使者が派遣されるという内容であつた。<sup>(1)</sup>そしてガーター勲章奉呈の使者としてコノート公爵長男アーサー王子が来日することも決定した。

ガーター勲章は、一三四八年にエドワード三世によって創始された、イ

ングランド・ガーター騎士団団員章である。その団員章が勲章と呼ばれる。<sup>(6)</sup>英国臣民でこの騎士に叙せられるのは二十四人以内に限定されており、叙勲は大変な名誉である。それがキリスト教徒ではない極東の小国に贈られることは、ガーター勲章の長い歴史の中でも例外中の例外であつた。迎える日本側も準備と対応に追われることとなった。ここまでの三十余年の外賓接遇の成果が遺憾なく発揮され、皇室のみならず各機関・個人が相応の接遇をし、ガーター勲章奉呈の諸儀式は恙なく終了した。今稿では完成形とも言える接遇・饗応、そして、今回はじめて確認されたガーター勲章ゆかりのボンボニエールについて論述する。

その後明治皇室では、明治四一年（一九〇八）に常宮昌子内親王、四二年（一九〇九）に周宮房子内親王、明治四三年（一九一〇）に富美宮允子内親王と内親王の結婚が続いた。<sup>(7)</sup>内親王たちの婚姻道具や成婚儀礼は贅を極めたものとなった。今稿では主に常宮昌子内親王、周宮房子内親王の成婚の諸道具立て、饗宴、そしてボンボニエールからその様相を確認する。

今稿も科学研究費助成事業基盤研究（C）「近代皇室の総合的西欧化過程研究—美術工芸品と文書史料双方方向からのアプローチ—」（課題番号20K00175）において研究対象としている学習院大学文学部史学科所蔵香川家史料（香川敬三・志保子父娘関係史料）を他の史料と共に使用した。<sup>(8)</sup>同史料の整理・調査については上野秀治、石井裕、梅田優歩に研究協力を依頼し、今年度も研究会等を開催した。この成果とし、本紀要紙上においては、石井裕が「昭憲皇太后の大礼服と洋装品の購入—香川家及び皇后宮職の関係史料から—」を掲載している。<sup>(9)</sup>また香川家史料中の桂宮史料につ

いて田中潤・梅田優歩が「資料紹介」香川家史料所収旧桂宮家所蔵史料の翻刻と解説（一）——和歌関係宸翰——について、梅田優歩が「香川家史料所収旧桂宮家所蔵史料の内容と伝来——香川敬三の桂宮家廃絶をめぐる動向——」の研究論文を公表している。同じく香川家史料を使用した研究成果として上野秀治は「史料紹介」欧州留学中の香川志保子書簡（一）<sup>①</sup>として志保子書簡の翻刻を掲載している。上記を合わせてお読みいただきたい。

なお、史料引用にあたっては、イギリス、フランスなど諸外国名表記は適宜略して記述した部分があることをご容赦いただきたい。また、旧字を適宜新字に変換して記した。

## 一、明治三十九年（一九〇六）ガーター勲章奉呈

### 一—— 事前の準備状況

明治三十八年十月二六日に天皇のガーター勲章授与の電信がもたらされた一ヶ月後の十一月一日、ロンドンの林董全権公使より小村寿太郎外務大臣に対し、天皇をどのように呼称するかについての問い合わせがあった。これに対し十一月二十日に田中光顕宮内大臣から小村寿太郎外務大臣あてに明治一六年（一八八三）四月の治定により「大日本帝国皇帝睦仁 Mutsuhito emperor of Japan」である旨の回答が示された。さらに林董全権公使は天皇の身長と頭蓋の寸法も尋ねた。これはガーター勲章授与の際に着用する「マンテル（ガーター・ローブ）」と羽飾り付き帽子を英国において調装するためであるが、天皇の身長や頭の大きさを測ることは容易ではない。そこで調度局御服掛が和服を調進する際に使用している「着丈鯨尺三尺九寸、四「フヒート」十「インチ」と「御帽 曲尺一尺八寸、一「フヒート」十「インチ」八分ノ一」を知らせることとなった。また英国セントジョージ会堂内に掲揚する旗についても問いあわせがあり、明治三十二年（一八八九）九月三十日に宮内省達第一七号にて制定された天皇旗に基

づき「地色紅 菊章金 横 縦ノ下二分ノ一 菊心旗面ノ中心 菊ノ心経 縦ノ一分ノ一 菊全経縦ノ六分四 画工へ命シ着色ノ事 英仏文ヲ以テ説明ヲ付ス」と回答した。<sup>②</sup>さらには、この来日接遇を機会に霞ヶ関離宮と宮内省外事課間、霞ヶ関離宮と宮内省主馬寮間に電話も架設された。<sup>③</sup>年が明け、アーサー王子と使節団一行の旅程が確定した【史料1】。

### 【史料1】

英国皇孫アーサー・オフ・コンノート殿下

御滞京中実際日割

二月十九日 月曜

横浜御着港 午前十時御上陸

御入京 午前十一時四十分新橋着

午餐 霞ヶ関離宮（表立セル方）午後一時

晚餐 有栖宮川邸 午後七時卅分

二月二十日 火曜

午前 参内 ガーター勲章贈呈 午前十時卅分

午餐 天皇陛下御尋問 午前十一時卅分宮城御出門

霞ヶ関離宮午後一時

我皇族御訪問

午後 東宮殿下 東伏見宮 閑院宮 北白川宮

伏見宮 有栖川宮

（久邇宮、梨本宮） 芝離宮ニ於テ

御待受ケ

東宮殿下御答問 午後五時卅分

参内 宮中大晚餐 午後六時卅分

続テ 舞楽御覧

二月二十一日 水曜

午前 各国公使引見 午前十時



午餐

後樂園 陸軍大臣  
帰途三越呉服店

晩餐

芝離宮 東宮殿下御催 午後七時

夜

英国大使館舞踏会 午後九時

二月二十二日 木曜

横須賀鎮守府

午前八時十五分新橋発

午餐

同九時五十六分横須賀着

晩餐

横須賀鎮守府 海軍大臣催 午後一時  
外務大臣 午後七時卅分

二月二十三日 金曜

午前

鴨猟 新浜御猟場 午前八時出門

午餐

御猟場 宮内大臣

晩餐

英国大使館 午後七時卅分

二月二十四日 土曜

午前

写真（丸木利陽）

午餐

伏見宮邸 午後十二時卅分

午後

音楽会（上野音楽学校ニ於テ英国大使夫人催）

晩餐

霞ヶ関離宮 午後八時

夜

伏見宮、閑院宮殿下外三宮殿下同妃殿下御臨席  
並二大山、山県両元帥以下

夜

演劇 歌舞伎座（実業団体催）

二月二十五日 日曜

午前

霞ヶ関離宮

午餐

午後一時

午後

御告別参内 晩餐御会食

夜

余興 独楽 手品 大神楽

二月二十六日 月曜

午前

天皇陛下御尋問 午前十時卅分宮城御出門

午餐

日比谷公園 東京市長催 午後一時

晩餐

独逸公使館 午後七時卅分

二月二十七日 火曜

御出発

内地旅行ノ為メ 午前十時卅分新橋発

三月十三日 火曜

御帰京

午後六時卅五分 新橋着

晩餐

三井集会所 西園寺総理大臣催

三月十四日 水曜

御出発

日光御遊覧ノ為メ 午前十時五十分上野発

三月十五日 木曜

御帰京

午後〇時二十五分上野着

午餐

霞ヶ関離宮 午後一時卅分

晩餐

ケンブリッジ大学出身者招待

有栖川宮邸

三月十六日 金曜

御退京

午前十一時五十分新橋発

御発船

午後三時卅分 横浜解纜

ガーター勲章奉呈式当日以外にも連日連夜午餐・晩餐が予定され、その他鴨場での鴨猟、歌舞伎見物、市中見物などが計画された。使節団は二月二七日からは静岡、鹿児島、宮島、江田島海軍兵学校、広島、神戸、京都、奈良、名古屋などを訪問し、各地で盛大な歓迎を受けた。

日本側の接伴員として陸軍大将黒木為楨・海軍大将東郷平八郎の他、宮中顧問官長崎省吾も任命された。<sup>15</sup>長崎は霞ヶ関離宮での接遇準備、アーサー王子の通訳、物品調達など八面六臂の活躍であった。三月一六日に使節団が離日をした後、三月一八日に船上のアーサー王子から長崎宛に諸般に渡り周到に用意がなされたことなどを感謝する手紙が出されている。<sup>16</sup>このことからその活動の様子を察することが出来る。長崎は翌明治四十年（一九〇七）伏見宮貞愛親王を名代とするガーター・ミッシェン答礼団が訪英した際も随行し、通訳のみならず、皇室必要品の買い物にも奔走して

いる。<sup>⑮</sup>

## 一―二 ガーター勲章奉呈当日の様子

二月二十日、ガーター勲章奉呈当日は雪であった。午前十時三五分にアーサー王子、初代リーズデイル男爵アルジャーノン・ミットフォード以下の随員は参内した。十時五十分には天皇は正殿に出御し玉座の中央に起立した。この際に長崎省吾は通訳のため天皇の後に控えた。天皇の服装は正装で、白色のズボンに長靴を履いた。列席者は文官は大礼服、陸軍武官は正装、海軍武官は正服用、女子はローブ・デ・コルテーであった。

ガーター勲章は、ガーターベルトを脚につけ、ピンでガーターベルトの端をとめて授与される。アーサー王子は明治天皇の脚にガーターベルトを付ける際に、緊張のあまりピンで自分の指を傷つけ出血してしまったが、何事もなかったように式を続け、天皇も気づかないふりをした。天皇は式が終わった後、王子の落ち着きをたたえた。<sup>⑯</sup>

皇后は風邪のために沼津滞在中、皇太子妃は服喪中のため欠席であった。そのため英国皇后アレキサンドラより贈与依頼のあった写真は後日威仁親王妃慰子を通じて皇后に贈られた。この写真は以前に皇后よりアレキサンドラへ贈った狎を抱いたもので、<sup>⑰</sup>ダイヤモンドで装飾された写真立に入れられ贈られた。これに対し皇后は親電を返送した。<sup>⑱</sup>

皇后の出御はなかったが、皇后宮職より正殿の接伴のために高倉寿子典侍、北島以登子権掌侍、香川志保子権掌侍取扱が出仕した。<sup>⑲</sup>

## 一―三 宮中晩餐会

奉呈式の当日夜、宮中晩餐会と舞楽が開催された。

午後六時三十分にはアーサー王子と使節団一行は再び参内し、天皇と皇太子が御車寄で迎えた。アーサー王子を天皇自ら鳳凰の間へ案内した後、豊明殿へ移り晩餐会が始まった。当日招かれたものはマクトナルド以下英国

大使館員夫妻及びリーズデイル以下使節団員と日本側関係者の合計六九人であった。

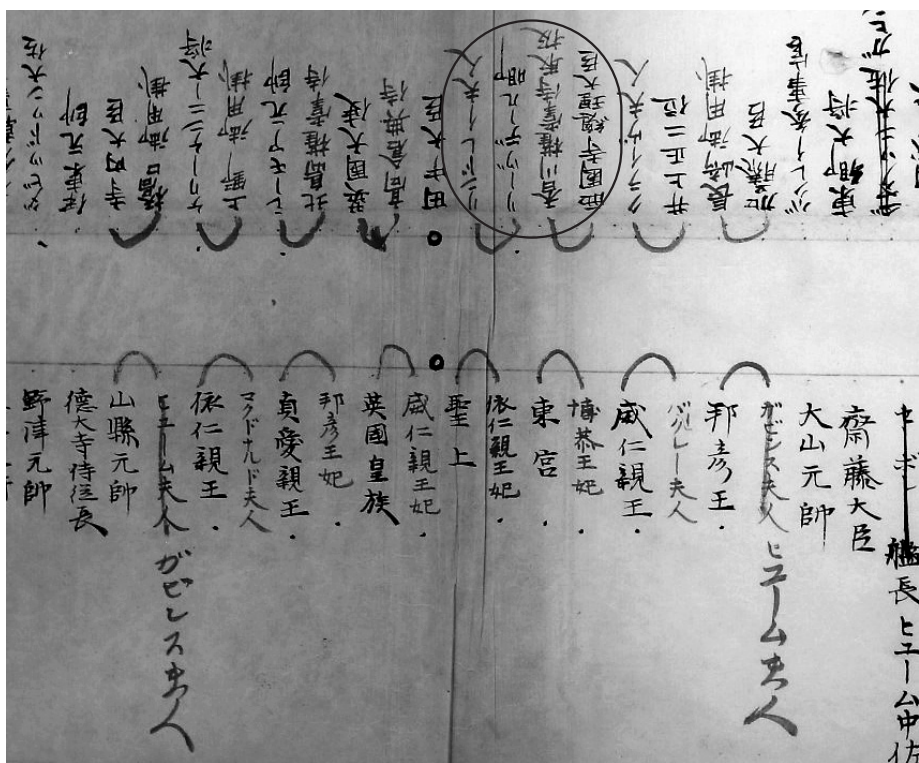
当日のメニューは【史料2】の通りである。<sup>⑳</sup>

### 【史料2】

- |           |       |      |        |
|-----------|-------|------|--------|
| 一 牛肉羹     | コンソメー | ア    | ランペリアル |
| 一 洋酒蒸鱒    | トリユイト | ソース  | コルペル   |
| 一 油焼犢肉    | ロンヂユ  | ド    | ウオー    |
| 一 凝汁寄雁肝   | ホワグラ  | アン   | アスピック  |
| 一 牛酪煎豌豆椎茸 | ポア    | パール  | ムーセロン  |
| 一 蒸焙山鴨    | ベカシス  | ロチー  |        |
| 菓子        |       |      |        |
| 一 プーダン    | ド     | タピオカ |        |
| 一 グラス     | シュル   | ブリーズ |        |

列席したリーズデイルによれば「晩餐は大変素晴らしく、しかも長時間はかからなかった」という。確かにこれまでの明治期の宮中晩餐会メニューに比べると料理数はかなり少ない。<sup>㉑</sup>料理内容は「牛肉羹」「牛肉のコンソメから始まり、「洋酒蒸鱒」は鱒のコルペル（青首鴨）風ソース。「油焼犢肉」は仔牛のロンヂユ、プランタニエ風、「凝汁寄雁肝」はフォワグラのアスピック、「牛酪煎豌豆椎茸」は豌豆、マッシュルームなどの温野菜ミルク煮、「蒸焙山鴨」はやましぎ（ジビエ）のロティとフランス料理の王道であった。デザートが出ると間もなく天皇が立ち、英国国王とアーサー王子の健康を祝しシャンパンで乾杯をした。<sup>㉒</sup>楽隊は英国国歌を奏し、次いでアーサー王子が立ち上がり天皇の健康を祝した。この間、楽隊は君が代を奏し、晩餐会は終了した。

リーズデイルは晩餐会を評して「極めて荘厳ではあったが、決して退屈ではなかった。私の両側に座った「婦人たち」が大変素晴らしい方々であっ



【図1 ガーター勲章奉呈式当日宮中晩餐会席次】（○印筆者）

たからである」と高い評価をしている。<sup>26)</sup> そのリーズ・テイルの両隣の「婦人  
たち」とは誰だったのか。「外賓参内録」によれば、最終的にリーズ・テイ  
ルの隣に着席したのは右隣がリンドレイ夫人で、そして左隣は香川権掌侍  
取扱、すなわち香川志保子だったのである【図1】<sup>27)</sup>。香川志保子の左隣は  
西園寺公望総理大臣で、正面は皇太子というかなり高い席次となる。未だ  
権掌侍取扱ながら北島以登子権掌侍よりも優位であった理由は実力だろう  
か、それとも香川敬三の娘ゆえであろうか。

その後、正殿にて舞楽が催された。「春庭花」「太平楽」の二曲が終わっ  
た段階で天皇はアーサー王子を誘い西溜の間に移動し、立食の卓に就いた。  
舞楽に招かれた二五〇人が陪食し、九時三十分には宴は終了した。

#### 一四 ガーター勲章関係のボンボニエール

【史料1】で見た通り、ガーター勲章奉呈式当日以外にも連日連夜午餐・  
晩餐が開催された。その数は十八回に及んだ。天皇主催の宮中晩餐会の際  
には皇室のボンボニエールが制作されてしるべき行事と思われるが、こ  
の際のものと断定できるボンボニエールは管見では発見できていない。<sup>28)</sup>

一方で、二月二日の英国大使館開催の舞踏会、もしくは二月三日の  
英国大使館で開催された晩餐会の際に英国側で用意されたと思われるボン  
ボニエールが現存する【長佐古 口絵1】<sup>29)</sup>。文庫形で、黒漆塗に金蒔絵で  
唐草文と共に英国王紋章（コート・オブ・アームズ）が描かれている。大  
きさは縦6.5cm、高さは2.5cmである。英国王紋章は盾の両側をイン  
グランドを象徴する獅子とスコットランドを象徴するユニコーンが支え、盾  
の上にはクラウンがおかれる。盾は四分割され、第一部分と第四部分にイ  
ングランドの国章である三頭の金のライオン、第二部分にスコットランド  
の国章であるライオン、第三部分にアイルランドの国章であるハープがそ  
れぞれ描かれる。盾の周りにはガーター勲章の文言である「Honi soit qui  
mal y pense」の文字が記される。それを「Dieu et mon droit」の文言が  
記されたりボンで支える。「Dieu et mon droit」（神と我が権利）、すなわ  
ち「王は神の恩寵を給わる」はイギリス君主のモットーである。<sup>30)</sup>

ボンボニエール上の紋章は金蒔絵による画であるが、これらを満たして  
おり、英国側が日本の業者に依頼し制作したものと推測される。

このボンボニエールの旧蔵者は北島以登子である。北島以登子は明治  
一年（一八七八）・二年（一八八〇）の鍋島直大の二度の洋行に随行し、  
明治一七年（一八八四）二月一日に宮内省御用掛となり、山川操、香川  
志保子と共に皇室の通訳、洋装御用を勤めた。<sup>31)</sup> 明治四五年に死去した際に



は「多年内廷の外国交際事務に当たり、功勞尠からざりしを追思し」千円が下賜されている。<sup>(32)</sup>

北島はガーター勲章奉呈式の際は権掌侍として前述の通り宮中晩餐会にも出席し、二月二日夜の英国大使館舞踏会の際にも手伝いとして午後八時より午後一二時まで香川志保子と共に皇后職より出向している。二月二五日のアーサー王子の告別参内、その後の豊明殿にての晩餐会の際には皇后宮職より千種ノ間に高倉典侍と香川志保子が出仕し、皇族妃の通弁として西一の間に北島以登子が出仕している。<sup>(33)</sup>

北島の在職期間は明治一七年より明治四五年の一八年間で、この間にボンボニエールが下賜される機会は明治二二年大日本帝国憲法発布式、明治二七年大婚二五年記念祝典、明治三三年皇太子成婚など限られている。英国外使館での催事については未調査であるが、明治一四年（一八八二）以降英国王室関係者の来日はなく、このボンボニエールが前述の英国大使館側の催しの際に制作下賜されたと考えてよいと思われる。<sup>(34)</sup>

## 二、内親王の結婚

### 二一、内親王の養育と皇子宫職

明治天皇の子供のうち、成人に達した男子は皇太子一人であったが、内親王のうち四名は成長し、明治四〇年代から大正初めにかけて、それぞれ降嫁した。

第六皇女常宮昌子内親王は明治二一年（一八八八）に園祥子を母として生まれた。第七皇女の周宮房子内親王は明治二三年（一八九〇）生まれで、常宮同様に生母は園祥子である。二人の皇女は明治二四年（一八九一）より天皇・皇后の元を離れ、高輪御殿にて養育された。皇女の養育は当初松浦詮に任されたが、明治二二年二月九日に枢密顧問官佐佐木高行が常宮御養育主任となり、周宮誕生の後には周宮養育主任も兼ねることとなった。

その際に佐佐木は高輪第一御料地に新殿を建築し、常宮及び新宮の住居

に充てることを願い出ている。<sup>(35)</sup> 高輪御料地はもとと肥後熊本藩細川家の下屋敷であった場所で、その後東京海軍病院となっていた。<sup>(36)</sup> 明治二二年に宮内省が土地・建物を買上げたのはこの佐佐木の進言に基づいたものである。高輪御殿造営にあたって佐佐木は自らの官舎を其の構内に設けること、両宮の旅行・転地等は一切佐佐木に委任することも願出ている。

また佐佐木は将来に於ける皇女教育の重要性を鑑み、明治二六年（一八九三）に下田歌子を歐洲に派遣し、歐洲における皇女教育を研修することも願い出た。その成果の一端なのか、年代は不明ながら、常宮・周宮の西洋料理稽古のために西洋食器が必要であり、その代価一式二十人分千七百〇八百円を下賜して欲しい旨を皇后宮大夫香川敬三が皇后に願出ている。<sup>(37)</sup>

明治二九年一月二五日に佐佐木の妻貞子に伴われて常宮・周宮が参内した際には、皇后は皇太子を初め皇子女の多くが虚弱である中で両内親王のみ健康に成長していることを歎び佐佐木夫妻を称賛した。<sup>(38)</sup>

第八皇女として明治二四年（一八九一）に生まれた富美宮允子内親王、明治二九年（一八九六）生まれの第九皇女泰宮聡子内親王は伯爵林友幸によつて育てられた。

ところで内親王の養育にかかる費用調達などの職掌はどこが担っていたのか。現在は宮内庁侍従職が担当しているようであるが、<sup>(39)</sup> 明治期においては天皇の裁可が必要であった。それを上奏する部署はどこであったのか。

四人の内親王が養育されていた明治後期の『職員録』宮内省の部分を点検してみると、明治二二年より「常宮」の項が立ち、明治二九年には「常宮」「周宮」「富美宮」「泰宮」の四内親王の項があるが、明治三二年（一八九九）にはすべての項の記載がなくなる。次に四宮の項が出現するのは明治三八年（一九〇五）で、「華族女学校」の下部組織として「常宮」「周宮」「富美宮」「泰宮」の項が出現するのである。そして華族女学校と学習院が統合された明治四〇年（一九〇七）には「学習院」の下部に記載が移り、翌明治四一年からは「東宮職」の下部に移動するのである。<sup>(40)</sup> 組織の改組はよくあることながら移動が頻繁であり、さらに明治三二年から三八年までは記載自体が

消えるのである。項が消滅した事由は判然としないが、この間も内親王の養育は続いているわけで、どこかがその管理をしなければならなかったはずである。結論から言えば後述の通り「蓋し皇女の養育は皇后親ら之れを為したまふの意に出で、皇后宮大夫をして其の職に依り之れを掌らしめんとするなり」と明治二十九年以降は皇后宮職がその職掌を担うこととなった。その経緯を『明治天皇紀』から見てみる。まず、明治二十九年一月二四日に佐佐木に対し以下の話もたらされた【史料3】<sup>(43)</sup>。

### 【史料3】

天皇、伯爵佐佐木高行の常宮・周宮養育の任を解き、常宮今夏避暑地より還るの後宮城に帰参せしめ、之れを皇后宮大夫子爵香川敬三に命じて赤坂東宮御所に於て養育せしめんとす、而して周宮の養育は故の如くし、又更に五月を以て誕生せんとする新宮の養育を卿に託せんとすと、高行、其の妻と謀り、翌日久元を訪ひて之れを辞して曰く、夫妻既に老齡、恐らくは新宮養育の任に堪ふる能はざらんとす、且周宮も亦學齡に達せられたるを以て、併せて臣が任を解き、常宮と俱に之れを敬三に託せられよ、兩宮を分離するは決して保育の宜しきを得たる所以にあらざるなりと、又侍従長侯爵徳大寺實則を訪ひ、重ねて其の情を陳べて執奏を諸ふ、然れども天皇之れを許さず、更に實則をして高行を諭さしめたまふ、是の日實則書を高行に致して曰く、常宮のことは久元の言の如く、周宮のことは猶故の如くなるべし、而して新宮の養育を卿に託するの聖意は尚渝りたまふことなし、但し卿若し此の命を拝するに至らば、卿の兩宮養育の任は併せて之れを解かる、ならん、今新宮の養育を命ずるの人なく、之れがために頗る軫念あらせらる、冀はくは命あるの日、卿敢へて之れを辞することなかれと

『佐佐木高行日記』ではさらに詳しく、「常宮には本年夏御旅行還御之上は御帰参と申候訳に付、皇后宮大夫香川敬三へ御用被仰付候。御附女官は

香川志保子香川娘、山川操子兼而兩人共宮内省御用掛之人なりに被仰付、赤坂東宮御所の内を御割合に相成候而常宮御住居に被為宛候との事。周宮は先以従前通御用相勤候様、又来る五日（ママ）頃降誕被為在候新宮の御養育被仰付候旨」と志保子と山川操が御附女官となる旨も記されている。佐佐木は姉妹を別に養育することを不憚に思っていたが、結局は「周宮も香川にて御用相勤候様被仰付旨申上候様可然と是亦決定せり」となり、常宮・周宮の兩宮共に香川が養育主任を任され、新宮の養育は前述の通り子爵林友幸が命ぜられた。

その後、改めて内親王の養育と教育についての命が下された【史料4】<sup>(44)</sup>。

### 【史料4】

是より先、天皇、伯爵佐佐木高行の常宮・周宮養育の任を解き、皇后宮大夫子爵香川敬三を主任とし、高輪御殿に於て養育せしめたまはんとす、蓋し皇女の養育は皇后親ら之れを為したまふの一意に出で、皇后宮大夫をして其の職に依り之れを掌らしめんとするなり、而して教育のことは華族女学校學監下田歌子をして専ら之れを掌らしめんとし、侍従長侯爵徳大寺實則をして歌子を召して之れを命ぜしめたまふ、蓋し是の年一月歌子、皇女教育に関する意見書を草して上りしに、天皇之れを善とし、此の命あらせられしなり、

然れども歌子、敬三と意見合はざるものあり、高行と事を共にするにあらずんば、其の任を全うする能はざることと言ひ、固く其の任を辞す、宮内大臣伯爵士方久元亦之れを諭すも、歌子遂に肯ぜず、久元、歌子を諭して語高行に及び、高行誠直なるも我意あり、近來其の行動動もすれば放恣に流る、あり、天皇、皇后之れを好みたまはず、又高行の妻の養育法には、宮内省中異議あることを告ぐ、高行之れを聞きて大に怡ばず、屢々兩宮帰参の期を定めんことを請ふ、初め五六月の頃を以て着参の期と定めんとしたまひしが、未だ決することなし、時に皇子女のことは事大小となく悉く宸慮に決し、他の関与するを聴したまはず、侍従長・宮内大臣と雖も如何



とすること能はず、高行等常に之れを以て、實則の無力にして、久元の冷淡なるの致す所と為し、其の輔佐宜しきを得ざるを歎ず、（中略）両宮の教育法は歌子の意見可なり、之れを採用せんとす、宜しく歌子をして授業を始めしむべしとの旨を以てせられたり、卿宜しく歌子と謀り、聖旨を全うせらるべしと、實則又歌子を召し、告げて曰く、曩に汝の上りし皇女教育意見書は悉く採用せられたるを以て、速かに両宮の教育に従事すべしと、高行・歌子即ち諾し、直に其の事に当たる

こういった香川と下田間に確執により混乱を来していたが、結局は香川が両宮の養育主任となり、教育については下田があたることに決着した<sup>(45)</sup>。

このように、内親王の諸事は皇后宮職が担うが、教育は華族女学校学監下田歌子が担ったため、明治三十年までは『職員録』に存在していた皇女養育掛は明治三年からは消え、明治三八年からは華族女学校下に記載されるようになったと考えることも出来るのではないだろうか<sup>(46)</sup>。

## 二―二、内親王の結婚準備

成長した常宮昌子内親王は明治四一年（一九〇八）に竹田宮恒久王と結婚する運びとなった。竹田宮は明治三九年（一九〇六）三月三十一日に北白川宮能久親王の第一王子恒久王を初代として新たに創設された宮家である<sup>(47)</sup>。同年一月十日に昌子内親王と恒久王の結婚の内旨が侍従長徳大寺實則に伝えられており、内親王の降嫁のために創設されたのである<sup>(48)</sup>。

翌明治四二年には房子内親王と北白川宮成久王との結婚が決まった。房子内親王の結婚の際には「諸事一に昌子内親王の恒久王に帰嫁せし時の例に準ず<sup>(49)</sup>」とされた。二人の結婚準備、特に海外からの諸品購入にあたっては調度頭であった長崎省吾である。長崎は明治三十年より常宮周宮御用掛に任命されており、また房子内親王の結婚にあたっては北白川宮御用掛も兼任している<sup>(50)</sup>。

長崎が購入した主な昌子内親王御用品は【史料5】（抜粋）の通りである<sup>(51)</sup>。

## 【史料5】

### 御飾品目録

一 御頸飾	一個	仏貨四万六千五百参拾法拾山
二 御冠	一個	同四万六千八拾六法拾六山
三 御コルサージ飾	一個	同四万六千五百参拾法拾山
四 御腕輪	一個	同壹万七千五百法
五 御パンタンチーフ	一個	同壹万七百五拾八法六拾式山

### （中略）

以上巴里ニ於テ購入

三〇 エメロード、ブリアン付御指輪 一個 英貨貳百参拾六磅五志

### （中略）

以上倫敦ニ於テ購入

通計金拾壹萬参千四百九拾貳円拾九錢四厘

### 内

金八万九千九百八拾貳円拾参錢也 巴里ニ於テ購入

此英貨九千六百六磅二志五片

此仏貨貳拾貳万九千壹百拾法

金貳万参千五百拾円六錢四厘 倫敦ニ於テ購入

此英貨貳千参百七拾九磅四志

### 外ニ追加

ダイヤモンド 眞珠御頸飾 仏貨六萬八千法  
ルビー付

是ハ伊国羅馬ヘ注文

通計金貳萬六千六百拾四円四拾八錢也

此仏貨六萬八千法 為換相場金壹円二付  
仏貨二法五拾五山二分ノ一

合計金壹拾四萬壹百六円六拾七錢四厘

### 御洋装目録

御大礼服（ローブ、ド、クール）但金モール付 一着 仏貨千五百法  
御大礼服二属スル

御裳（マントウ、ド、クール） 一着 仏貨七千五百法

但水色地天鷲絨金銀モール付縁イルミン人造真珠裏金綵織 一着 仏貨四千五百法

御婚儀服（モンタント）  
但白地縐子手製レース飾付 白紗裂地 附属  
右白地服ヲ夜会服ニ流用スル 一着 仏貨四百法  
御デコルテ

但白地縐子人造真珠ビーツ飾付 一着 仏貨千四百法

御晩餐夜会服 一着 仏貨千四百法

但白地銀モール飾付  
御ジュボン 一着 仏貨二百法

但白地更紗タフタレースリボン飾付 一着 同参百法

晩餐夜会用 御ジュボン 一着 同参百法

但白紋縐子リボン、レース付  
（中略） 一着 同参百法

イニシャル付御ハンケチ 一打 仏貨二百一法

（中略） 一打 仏貨二百一法

イエード皮 御白手袋 半打 仏貨九拾参法

（中略） 半打 仏貨九拾参法

黄色御沓下（金綵製）  
（半着用） 一打 仏貨三拾法

（中略） 一打 仏貨三拾法

御ジュボン用 機械レース 拾八メートル 仏貨百拾七法  
同上 拾八メートル 仏貨百拾七法

御紅 一箱 同六法

御大礼服用金綵織裂地御半沓 一足 仏貨五拾六法

デコルテ用梔色絹地同上 一足 仏貨五拾六法

御化粧靴 一個 仏貨七百六拾七法拾山

御帽子靴 一個 同百五拾法五拾山

三方面御姿見鏡 一面 同三百二拾法拾山

通計金二万六千八百四拾壹円八拾壹錢八厘

此英貨式千七百六拾六磅七志五片

此英貨六万八千参百四拾参法八拾五山

外二

金六百四拾参円参拾貳錢七厘 運搬及保険料

此英貨九六拾五磅二志壹片

此仏貨千六百参拾八法

合計金二萬七千四百八拾五円拾四錢五厘

（中略）

獵虎毛皮 四枚 金三千六百円

右報效義会ヨリ買上 計金三千六百円

洋食器目錄

銀洋食器目錄

銀鍍花盛台 英貨三拾磅四志

但葡萄彫刻

中心玻璃大皿一枚 周圍玻璃小皿六枚

並二簞形玻璃入子付ノ果物入三個附属

（中略）

銀製橢円形鉢 大一対 英貨三拾磅四志

但透シ彫玻璃入子付

(中略)

銀製珈琲注 一個  
銀製茶注 一個

英貨三拾六磅四志  
同英貨三拾磅三志

(中略)

ウエルリントン形銀器ノ部  
テールフォーク 百六拾八本  
同 スプーン 七拾貳本

英貨百拾五磅拾志  
同四拾九磅拾志

(中略)

計英貨千參百五拾五磅參志六片

外二

テールフォーク以下七百七拾壹品へ  
御紋章彫刻料

英貨貳拾貳磅拾志

保険料 英貨九磅

通計英貨千參百八拾六磅拾參志六片

此金壹萬參千六百拾八円五拾錢也

為換相場金壹円二付英貨貳志0片十六分ノ七

(中略)

合計英貨千四百六拾參磅拾壹志六片

此金壹万四千參百七拾參円七拾參錢也

硝子洋食器目録

シャンペン酒盃

參拾個

仏貨百七拾貳法五拾山

水呑盃

參拾個

同百七拾貳法五拾山

(中略)

計

仏貨千七百拾法

陶洋食器目録

平皿

拾打

仏貨千七百七拾五法

ソップ皿

參打

同參百五拾貳法五拾山

(中略)

計仏貨四千七百參拾貳法五拾山

外

荷造費

仏貨貳拾六法

巴里ヨリ横浜マテ運賃

同百貳拾四法九拾山

合計仏貨四千八百八拾參法四拾山

此金壹千九百拾參円五拾四錢一厘

内

仏貨千六百四拾貳法 巴里ニ於テ内金渡

此英貨六拾五磅五志參片

此金六百四拾四円八拾九錢一厘

仏貨參千貳百四拾壹法四拾山 殘金送金ノ分

此金千貳百六拾八円六拾五錢也

為換相場金壹円二付  
仏貨貳法五拾五山二分ノ一

このように莫大な量の品々が購入された。洋装品購入先は史料に残る鉛筆による注記では「Walles」と読める。「Walles」については後述する。

仏国製洋食器の購入先は明記されていないが、現在竹田家に遺るものはフランス・リモージュのアビランド製であるので、製造はアビランドであろう。

明治三三年（一九〇〇）の皇太子の結婚の際にはハンカチ等の洋装必要品は日本で調達されていた<sup>(2)</sup>。西欧化が進む中でも国産、もしくは日本国内で調達しようとの皇室の意図が感じられた。しかし今回は洋装及び洋装に必要な品々はほぼ外国で調達している。唯一日本で調達しているのは「獺虎毛皮 四枚 金三千六百円 右報效義会ヨリ買上」である。報效義会は明治天皇による片岡利和侍従の千島列島差遣に心を動かされた海軍大尉郡司成忠が北方警備のために明治二六年（一八九三）に結成した組織である。郡司は予備役となり、同じく予備役となった隊員約五〇名と共に手漕ぎボートで東京より出発し千島列島北東端の占守島に向かい、現地に報效義会本部を設置した。報效義会隊員達は占守島の厳しい環境下で生活し、ま



た日露戦争時にはロシア軍の捕虜になるなど苦難が続いた。<sup>(33)</sup> こういった事情を汲んで購入に至ったと推測される。

昌子内親王婚儀書類には記載がなかったその他の御道具類について、周宮房子内親王婚儀の際の記録から推測することが出来る。<sup>(34)</sup> それによれば「器具」類は御髪上具以下御装束箱までで合計二、〇九四円一四銭、三日夜餅関係が三三一円、御爪箱も含まれる御道具類は八、〇五一円八四銭、屏風類が四五五〇円、洋風御道具の御服戸棚から御靴入箱で五、三二七円八八銭七厘、和食器が二、一四五円九十銭、文台硯箱・料紙硯箱は二組で三、三五〇円、十種香道具が二、八八三円八十銭、茶道具が一、八二七円十銭、生花器が一、〇四七円八十銭、琴・胡弓・三味線が九三四円五十銭、碁・将棋・双六盤で四五四円、このほか金庫が二五八円、スタンウェイ製グランドピアノとバイオリンで合計二、四〇〇円四五銭であった。この楽器類を取扱っていたのは現ヤマハとなる共益商社であった。

その他女中、祐筆預かり品として筆筒、長文箱、火熨斗などがあり、その合計が七四八円、物品の外箱や修復品の計が五五三円四銭であった。このほか英国より購入したブラシ類一七三円四十銭などがあり、「器具」類の総計は三五、〇九八円三二銭七厘となる。恐らくは昌子内親王の御道具類もこれと同様のものが用意されたと考えられる。

房子内親王の婚姻のための洋装品についても、昌子内親王の時と同様に調度頭長崎省吾が渡欧し、購入を担当している。<sup>(35)</sup> 史料によれば「ブラチナ製ダイヤモンド入御頸飾」は仏貨五二、五〇〇フラン、「御冠飾」は五二、〇〇〇フランでその他の装飾品と共に巴里のマレー宝石店(MARRET Frères)<sup>(36)</sup>より購入、「真珠七拾個付ブラチナ製長鎖」はエルネスト・リンゼレル継続商店(ernest linseler)より四、五〇〇フランで、「エメラルド及金剛石装着巾着」はロベール商店(robert)より二、二二〇フランで、「ルビー及金剛石入ブローチ」はホール・ヘイネー商店より三三三フランで購入し、仏国パリにての購入額総計は割引後で二九万五、二九四フラン・邦貨として十一万六、四八八円六一銭八厘であった。このほかに英国王室御用達商店として著名なコリンウッド商会

(collingwood)、同じくアール・エス・ガラード商会(R & S Garrard & Co)よりも指輪等を二、三四八ポンド一六シリング、邦貨で二三、二四五円八五銭六厘で購入した。英仏合計で一三万九七三四円四七銭四厘であった。ドレス類はいずれも「ワールス商店」が納入したもので「白綾縐子手製レース飾オレンヂ花付属御婚儀服」四、五〇〇フラン「白亀甲紗銀糸色絹飾ビーツ付御大礼服」一、五〇〇フランなど計一〇六点を購入している。「ワールス商店」は前述の昌子内親王のドレス類を納入した「Wallis」と同じ店であり、また石井論文で言及されているように、明治末年まで皇后のドレスも納入していた、言わばパリにおける皇室御用達洋装店であった。<sup>(37)</sup>

この他にレドヘルン商店納入の「御散歩用羅紗御外套」五七五フラン、エルネスト・キー商店より「鼈甲製レース付御扇子」一、九〇〇フランなど、ベタイユ商会より「金製狗頭握付刺繍浅黄色御日傘」四六五フラン、ガラン商会(garand fres)より髪飾り類、アンリ商会、ア・ブーダー商店、ピノー商会、オー・ツーリスト商会などより各種装飾品が、ルーブル商店(Louvre)より三面鏡が納入され、その総額は仏貨六、八五六フラン九十サンチーム、邦貨にすると二七、〇四八円一二銭四厘であった。この他英国では倫敦に店を構えた飯田高島屋よりレースを購入し、フィンニガンス商店、ドリユー・エンド・ソンス商会(Drew & Sons)、王室御用達のアスプレイ商会(Asprey & Co Ltd)、ディープ商店(A.W. Dear & Co)より鞆類を購入、英貨五七ポンド十シリング、邦貨にして五六九円七銭二厘であった。また昌子内親王の時と同様に報效義会より「獵虎毛皮」三枚を購入している。

房子内親王用の銀製洋食器、ガラス製品は英国王室御用達の「マップイン・エンド・ウエップ商会」(Mappin & Webb)において英貨一、一九九ポンド一八シリング六ペンス、邦貨では一、二八六五円二三銭七厘で購入された。いずれも現地で御紋章装飾を依頼しており、例えば「紅色白葡萄酒盃」の装飾代は一個につき六シリングであった。陶製洋食器も「マップイン・エンド・ウエップ商会」にて購入された。こちらも現地で御紋章装

飾が依頼され、全装飾代は六三ポンド六シリング、全合計で三二七ポンド三シリング六ペンス、邦貨で三、二三八円二銭一厘であった。北白川宮家旧蔵の洋食器はロイヤルウースター製であり、その製造年代は一九〇八年であった<sup>(58)</sup>。従って、この食器類がこの時購入されたものに該当することが裏付けられる。その他ナフキンなどの食卓リネン類は倫敦ロビンソン・クリューアー商会製のものを飯田新七を通じて購入した。

「諸事」に昌子内親王の恒久王に帰嫁せし時の例に準ず」とされた房子内親王の結婚諸道具は、確かに種類・数は昌子内親王に準じていたが、費用面では高額となっているように思われる。明治四二年四月一六日付東京朝日新聞にも「周宮御慶事記事 四十余万円の御調度」と報道されるほどであった<sup>(59)</sup>。

房子内親王の洋装品調達は長崎省吾が担ったが、式の際の着装等については香川志保子とその任にあたった。婚礼の二週間ほど前に北白川宮家より近藤久敬総務課長を通じて香川敬三へ志保子を婚礼の際に北白川宮御用取扱として派遣して欲しい旨打診があった<sup>(60)</sup>。香川敬三は皇后と志保子に打診をしたところ、皇后からは「御手伝ト云フコトナレバシ」との事で、志保子も「真之暫時ナレバ御請申上ルト云、併シ御用掛之名義等ハ御免ヲ蒙ル旨申出ズ」と返答するのはどうかと父に書き送っている<sup>(61)</sup>。近藤からは「実際ノ御手伝ニテ重畳ナレドモ御儀式事故、暫時ニテモ名義必要ニ付」と「北白川宮御用掛」となることを再度要請した。結局は志保子は「臨時北白川宮御用取扱」に任命され、洋装関係の諸事を担った。

このような諸品購入費用とは別に結婚後の住居として高輪御料地内に竹田宮邸・北白川宮邸が建築され、両宮家へ下賜された<sup>(62)</sup>。

## 二一三、房子内親王北白川宮成久王成婚式・宮中晩餐会

宮邸建築をはじめ諸事用意が整い、成婚式当日を迎えた。ここでは志保子が関係した房子内親王の成婚式の様相を香川家史料【史料6】<sup>(63)</sup>から見て行く。

### 【史料6】

四月二十九日

午前七時

御用取扱高輪御殿へ参上

着服ローブモント

馬車ハ午前六時 御用取扱邸へ着ノ筈

午前八時

房子内親王高輪御殿御出門賢所候所へ御参入

午前十時

両殿下賢所御出門御朝見トシテ御参内

午前十一時

紀尾井町御邸へ御着 供膳式

御霊殿御拝ノ上御召替 桂袴

御近親御対面

正午十二時

御祝御膳

午後一時半

勅使御使御引受

右畢テ妃殿下ローブデコレーニ御召替

御用取扱同断

午後五時十五分

御出門御参内

午後六時

御陪宴ノ後高輪南町御邸へ御帰邸

四月三十日

午前九時三十分

南町御邸御出門

王殿下礼装妃殿下ローブモント

竹田宮へ御立寄

御参内

午前十一時四十分

霞関離宮へ御着

御召替 王殿下軍装 家令以下同断

妃殿下ヴィジチングドレス

午 十二時三十分

御祝宴

御食事後御召替

王殿下礼装 家令以下同断

妃殿下ローブモント

午後三時	霞関離宮御出門 東宮御所 皇孫御殿 伏見宮 閑院宮 有栖川宮 東伏見宮 霞関離宮へ御着 御召替 妃殿下ローブデコレター
午後四時五十分	晩餐
午後六時三十分	夜会
午後九時	右畢テ御帰邸
五月一日	午前 麻布両宮殿下御訪問 御引受 御出門 午後一時 華頂宮 久邇宮 鳥居坂御用邸 麻布御殿 豊島岡 清棲家 山階宮 梨本宮 宮内大臣 侍従長 島津家
五月三日	午前十時 御同車御出門 王殿下軍装妃殿下通常服 正午 御祝宴 午後三時 園遊会 右畢テ御帰邸

四日間渡る婚礼諸儀式中、賢所儀式のみ和装で、それ以外は洋装で行われることは、皇太子の婚礼時よりの通例である。そして、四月二九日午後六時より宮中において晩餐会が開催された。

当日のメニューは「臨時費周宮御婚儀費（式典費<sup>64</sup>）」によれば以下の通りである。

# 【史料6】

一	コンソメー トルチユイ	鼈羹汁
一	トルプイッソモネソースリウオニー	鱒蒸煮汁
一	ヒレド ブーフモンモランシー	牛織肉蒸焼 添洋薊
一	ダミエドフワグラ ストラスブルジョワーズ	雁肝凝汁寄
一	ソースエスカルゴ	
一	ダンドンノー トリフェーエフランケットカイユ	七面鳥及鶉蒸焼
一	フワルシユイ サラド クエオトレチウ	生野菜
一	アスペルジュ ソース ムスリン	洋独活注汁
一	シャルロット アラプランセッサドガール	冷菓
一	グラニテー オーフレーズ	氷菓
一	コロケット オーバルメザン	乾酪
一	デセル	乾草 果物
一	カフェー	バナナ 和林檎 ネーブル和蜜柑 珈琲

今回も料理数が少なく、洗練されたコースとなっている。この料理の調理・配膳を大膳寮とともに担ったのは精養軒北村重昌と東洋軒伊藤耕之進である。東洋軒は精養軒と共に西洋料理店の双璧と称され、伊藤はその後東京會館の設立にも尽力した。<sup>65</sup> 伊藤は皇族・大臣・公使・勅任官など一四人分を担当し、北村は錦鶏間祇候その他勅任官・奏任官二六人分を担当した。料理材料費はこれとは別に「七面鳥 中 三羽」、「若鶏 五貫拾匁」、「鶉 参拾羽」については伊東健造が、「牛肉ヒレ 一二斤」「牛肉スネ 一二斤」などは河合万五郎が、「雁肝」「トリフ」「酢」「チーズ」などは山田善三郎が納入した。

飲料は白葡萄酒四九瓶、赤葡萄酒六一瓶、三鞭酒四五瓶、雑種酒五三瓶を五五一円五一錢八厘で予備品より周宮御婚儀費へ移動している。そのた



め改めて予備品としてシャンパン「クリコ」、白葡萄酒「シャトー クリマン」、赤葡萄酒「ピション ロング ヴィルユー」などが伊藤耕之進により納入された。この際に「甲斐産赤葡萄酒 四拾八本 一本二付五十錢」が宮崎光太郎より納入されている。これがこの時の宮中晩餐会で使用されたのかは不明であるが、これまでの宮中晩餐会では明治七年（一八七四）以来フランス産ワインが使用され、それは現在まで続く伝統となっている<sup>(66)</sup>。その後この国産ワインは引き続き用いられたのか、現在国産ワインが用いられなくなった経緯などは現状では不明である。またテーブルを飾る盛花は「鉄砲百合」六八〇株、「カラー」五十株、「マトリケート」百株、「ナルシス」百株が横浜植木鈴木卯兵衛より購入された<sup>(67)</sup>。饗宴費の総計は五、三四四円八四錢八厘であった。

## 二一四、昌子内親王・房子内親王成婚の際のボンボニエール

婚儀の際にはもちろんボンボニエールが制作された。慶事にボンボニエールを制作・配布することはこの時期には皇室の慣例となったと言っただろう。

竹田宮恒久王と昌子内親王の成婚に際し天皇家で作成されたボンボニエールは柳筥形である。柳筥とは、神へ供え物を捧ささげる際に使用されるもので、柳を細い三角形に割り並べ、麻糸で綴じた蓋付きの精巧な容器である。正倉院宝物にも十数点が残り、現在でも、伊勢神宮では真珠などの宝物を収納する箱として使われている。それをボンボニエールでは、純銀の板と銀糸で再現している。蓋表には大きな十六葉八重表菊紋（天皇家紋）を配し、赤色の絹の打紐が付けられている。

もう一点、昌子内親王結婚関係と推測されるボンボニエールが存在する<sup>(68)</sup>。旧北白川宮家縁故者所蔵の箱形燕文で十四葉一重裏菊紋（宮家共通紋）が付される。中には「竹田宮様御慶事の節」（朱筆）「常宮様竹田宮様より午さんをめし乃節ばんばん」との紙片を蔵する。箱形燕文は皇族の結婚の際に新郎新婦の枕元に供される三日夜餅具の「紫檀二螺鈿ノ箱」を模した

ものである。縦3.8 cm、横4.6 cm、高さ2.6 cmの銀で造り、それを同じく婚礼用具である「鶴形御台<sup>(69)</sup>」を模した木製台に入れて、配布された。【長佐古 口絵2】

房子内親王と北白川成久王結婚の際の天皇家のボンボニエールは台付色紙文庫形である【長佐古 口絵3】。六五八個が四、八一三円二七錢で小筆英茂により納入された<sup>(70)</sup>。

この他に北白川宮家よりの依頼により、調度寮は銀製菓子器二百個、一、二八円八十錢の製造を請負った<sup>(71)</sup>。史料上「銀製ボンホニー」、「銀製御菓子器 但行器型」、「御菓子器 銀製八角形御紋章付及赤絹紐付」などと記されるこの菓子器の詳細は「純銀製目方一個二付二五匁付 甲へ御紋一ヶ所高彫廻りへ若松二鶴ノ彫 惣体アラシ仕上ケ御紋及鶴ハ磨キ 絹紅ノ紐付」と記されている。このボンボニエールに該当するものは、今まで来歴不明とされてきた「八角形松鶴文ボンボニエール<sup>(72)</sup>」の形状と一致することが、この史料により判明する【長佐古 口絵4】。

## おわりに

日清・日露戦争に勝利した大日本帝国は一等国の仲間入りをした。その一等国入りにある意味「お墨付き」を与えたのは英国王より明治天皇へのガーター勲章の奉呈であった。英国コノート公爵長男アーサー王子をガーター勲章奉呈の使者として迎えた儀式を恙なく終え、その夜には宮中晩餐会が開催された。宮中晩餐会の際にはガーター勲章奉呈使節団長リーズテイルの横には香川志保子が着席し、リーズテイルを楽しませる会話を弾ませた。香川敬三が志保子を英国に留学させた意図通りに、志保子はその役割を果たしていた。当日、宮中晩餐会後には舞楽を催し、立食で招待者をもてなした。後日の新浜鴨場での鴨猟接待など一連の流れ、外賓饗応の様式がこの奉呈式前後で出来上がってくるのである<sup>(73)</sup>。

今回このガーター勲章奉呈関係と推定されるボンボニエールを確認することが出来た。同作品は晩餐会などで全員に配られたというよりは、お世

話になった御札として通訳や洋装手伝いなどをした北島以登子に渡されたものとも考えられる。<sup>(74)</sup> この奉呈儀式の際に先頭に立ち接伴にあたった長崎省吾には、アーサー王子より金製王冠並英国皇帝陛下御名字入巻煙草人が贈られているからである。<sup>(75)</sup> いずれにしても日本において英国側発注で、ボンボニエールが制作されたということは、既にこの時期にボンボニエールを制作下賜することは日本皇室の慣例となっており、それが英国側にも認識されていたという証左になろう。

その二年後と三年後の明治四一年・四二年には常宮昌子内親王と竹田宮恒久王、周宮房子内親王と北白川宮成久王の結婚が続いた。内親王の養育や教育、婚儀の準備などに大きな役割を果たしたのは皇后宮職であった。内親王の養育は幼少期の養育主任の手を離れた後は、「皇女の養育は皇后親ら之れを為したまふの意に出で、皇后宮大夫をして其の職に依り之れを掌らしめんとするなり」との意を以て、皇后宮大夫、即ち香川敬三がその職掌にあたった。

内親王の成婚準備に奔走したのはガーター勲章奉呈式接遇で活躍した調度頭長崎省吾であった。長崎はイギリス、フランスなどより数十万円に及ぶ洋装品・装飾品・調度類の買い付けをした。明治三三年（一九〇〇）の皇太子の結婚の際にはハンカチ等の洋装必要品は日本で調達されており、西欧化が進む中でも国産、もしくは日本国内で調達しようとの皇室の意図が感じられた。しかし今回は洋装及び洋装に必要な品々はほぼ外国で調達している。ほぼ唯一国内調達であったのは報効義会が取り扱った猊虎毛皮であった。この状況は「一等国」となった証なのか、それとも内親王の位の高さ故なのか。

内親王の位の高さに関しては、昌子内親王の結婚に際しての応答が参考となる。昌子内親王が降嫁する一月ほど前に天皇より内親王が婦嫁後の席次に関して侍従長徳大寺實則に垂問があった。實則は「内親王一人他の皇族妃と同席するときは皇太子妃の次に班し、恒久王と共に他の皇族と伍するときは皇位継承の順序に従ふべき旨を奉答した。<sup>(76)</sup> 内親王二人であれば、結婚し臣下となった後も皇太子妃の次席に配されるのである。

二人の内親王の結婚の際には、天皇家と宮家側のそれぞれでボンボニエールが制作されていたことが確認できた。宮家側で制作されたものはいずれも宮家共通紋を蓋上に付した箱形燕文ボンボニエールと八角形松鶴文ボンボニエールである。これまで各所調査において実見していたが、その来歴は不明であった。今回この二点を確認したことで来歴が判明したと共に、宮家側で用意されるボンボニエールには宮家共通紋を使用する、ということ裏付けることが出来た。宮家共通紋を付した来歴不明のボンボニエールは数多あるが、これらについても史料を読み解くことで、今後も来歴が判明することが期待出来る。

そして、房子内親王の成婚饗宴に際しては、国産ワインが購入された。宮中晩餐会で実際に使用されたのかは不明であるが、これまで拙稿で言及してきたように、宮中晩餐会では明治七年（一八七四）以来フランス産ワインが使用され、それは現在まで続く伝統となっていた。そういった中、令和五年（二〇二三）一月二八日トゥオンベトナム国家主席夫妻を饗応した宮中昼食会では、両陛下の発案により前菜は日本食となり「押し寿司」が出され、両陛下の発案で初めて日本酒で乾杯が行われた。乾杯のために用意されたのは日本の伝統工芸品である「江戸切子」の冷酒杯であったという報道もあった。<sup>(77)</sup> この令和五年までの一四〇年の伝統の継続の中で、いつ国産ワインが用いられたのか、なぜ国産ワインが用いられなくなったのかについては引き続き調査を要する。

明治のはじめからの怒涛の西欧化の中で、西欧化を推進しながら国産を志向し、伝統技術を守る皇室の姿勢は明治の終りに来て大きく変化したように本稿からは推論される。それが令和に至り再び国産志向に回帰する大きな変革をしたのである。令和の宮中晩餐会では、今後どのような料理、酒が供されるのか注目である。

大正・昭和・平成の皇室の慶事と宮中晩餐会、そしてそれを形作る諸調度・着装や献立・飲料などどのように変化していくのか。明治皇室が目指した西欧化の中での国産品の保護は大正、昭和、平成、令和とどのように変化していくのか。今後も調査研究を続けたい。

謝辞

本稿を成すにあたり、多くの方々からご教示とご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。(敬称略)

朝香誠彦、朝香貴子、石井裕、上野秀治、梅田優歩、小島温子、香川擴一、香川和敬、梶田明宏、北白川慶子、北白川明子、君塚直隆、桑尾光太郎、黒田清子、竹田恭子、田中潤、谷口裕信、千葉功、鶴三慧、長佐古真也、長谷川怜、東園基政、藤田美季、舟川はるひ、牟田行秀

学習院アーカイブズ、学習院大学文学部史学科、学習院女子中等科・高等科、宮内庁宮内公文書館、皇學館大学文学部国史学科、国立国会図書館憲政資料室、東京都埋蔵文化財センター

本研究はJSPS科研費 JP20K00175 の助成を受けたものです。

- (1) 長佐古美奈子「宮中晩餐会の歴史的考察 その(一)——現在に続くイギリス風の導入——」(『学習院大学史料館紀要』第二六号、二〇二〇)同「宮中晩餐会の歴史的考察 その(二)——明治二二年大日本帝国憲法発布式の諸様相——」(『学習院大学史料館紀要』第二七号、二〇二一)同「宮中晩餐会の歴史的考察 その(三)——大婚二五年記念祝典・皇后の活躍——」(『学習院大学史料館紀要』第二八号、二〇二二)同「宮中晩餐会の歴史的考察 その(四)——明治三三年皇太子結婚から見る西欧化——」(『学習院大学史料館紀要』第二九号、二〇二三)
- (2) 片山慶隆「日英同盟と日本社会の反応1902-1904 (1)——言論界の動向を中心として——」(『一橋法学』第二巻第二号、二〇〇三)によれば、従来の日英同盟研究では、同盟交渉過程と「日露戦争への道」においての日英同盟の役割に分析が集中しているとしている。片山
- (3) は言論・社会への影響についての研究を展開しているが、皇室の対応などに言及している研究は活発ではない。
- (4) 日英同盟はロシアの極東進出の牽制を目的とし、締結国の一方が二国以上と交戦の際は、他方が参戦の義務を負うと規定を協約していたが、日本は対露戦争に単独で臨む方針をとり、イギリスに軍事援助でなく財政援助を期待すると申し入れ、イギリスは好意的中立を約した。
- (5) 宮内庁宮内公文書館蔵「在倫敦林全權公使発小村外務大臣宛電信299号(天皇へガーター勲章贈進ノ件)」(識別番号51841)、所蔵館名以下宮内公文書館と略。
- (6) 「コンノート公爵家のアーサー王子」(Prince Arthur of Connaught)は、ヴィクトリア女王の第三王子であるコンノート公爵アーサーの長男として、一八八三年に生まれた。明治三八年当時日本では「コンノート殿下」「コンノート殿下」などと呼称され、現在でも「コンノート」「コンノート」と記されることが多い。しかし父コンノート公爵と息子が同じ名前のため誤記誤認も多い。そのためここでは「アーサー王子」と記す。
- (7) 勲章名の「ガーター」とは、靴下留めのこと。エドワード三世が舞踏会でダンス中に相手婦人のガーターが外れて落ちたことで、周囲から嘲笑された。エドワード三世はガーターを拾い上げ、「Honi soit qui mal y pense」(中世フランス語で「悪意を抱く者に災いあれ」の意)と言って自分の左足に付けたとされる。これがガーター勲章の由来となったという説がある。
- (8) 泰宮聡子内親王は大正五年(一九一五)に東久邇宮稔彦王と結婚している。
- (9) 史料の閲覧に際しては学習院大学文学部史学科千葉功教授と史学科研究室にご高配を賜った。なお同史料は令和六年度に学習院大学史料館が霞会館記念学習院ミュージアムへ移動する際に、史学科より移管されることとなっている。香川家史料の最新の動向・内容に



については長佐古美奈子「昭憲皇太后を支えた父娘―香川敬三・志保子史料の紹介―」（明治神宮国際神道文化研究所『神園』三〇、二〇二三）を参照されたい。

- (9) 石井裕「昭憲皇太后の大礼服と洋装品の購入―香川家及び皇后宮職の関係史料から―」一〇一―一八頁。

- (10) 田中潤・梅田優歩「史料紹介」香川家史料所収旧桂宮家所蔵史料の翻刻と解説（一）―和歌関係宸翰―一六九―一八四頁。梅田優歩「香川家史料所収旧桂宮家所蔵史料の内容と伝来―香川敬三の桂宮家廃絶をめぐる動向―」五五―六八頁。

- (11) 上野秀治「史料紹介」欧州留学中の香川志保子書簡（一）一四三―一五五頁。

- (12) 現在でもウインザー城内・セント・ジョージ礼拝堂の中には十六葉八重表菊紋の「皇旗」がはためいている。

- (13) 以上、宮内公文書館蔵「外賓接待録三 明治三十九年」（識別番号76793より）。

- (14) 註13に同じ。宮内公文書館蔵「外賓接待録三 明治三十九年」（識別番号76793）。

- (15) 国立国会図書館憲政資料室蔵「長崎省吾関係文書」442-2、以下所蔵館名略。

- (16) 「長崎省吾関係文書」6125

- (17) 「長崎省吾関係文書」314、317

- (18) 『明治天皇紀』巻一一 明治三十九年二月一九日条 四八二頁（吉川弘文館、一九六九）以下『明治天皇紀』と略。

- (19) この写真は『時好』明治三十九年一月一日号（三越百貨店、一九〇六）に掲載されている「英国皇后と愛狎マーベル」と思われる。三越呉服店は狎マーベルの涎掛けを手掛けたという。([AD STUDIES] 公益財団法人 吉田秀雄記念事業財団 VOL.60、二〇一七) 四三頁。

- (20) 『明治天皇紀』巻一一 明治三十九年二月一九日条 四九〇頁。

- (21) 宮内公文書館蔵「日記 明治三十九年 皇后職」（識別番号24720）

- (22) 「秋山徳蔵メニユーカード・コレクション」2015年企画展示会資料<sup>82</sup>（公益財団法人味の素食の文化センター食の文化ライブラリー、二〇一五）。

- (23) アルジャーノン・ミットフォード著、長岡祥三訳『ミッドフォード日本日記 英国貴族の見た明治』（講談社学術文庫二〇〇一）、四一頁。

- (24) 例えば明治三十三年の皇太子成婚時「御婚禮当日宮中ニ於テ御催ノ立食」メニユーと比較するとその少なさが際立つ。前掲「宮中晩餐会の歴史的考察 その（四）―明治三十三皇太子結婚から見る西欧化―」二四頁。

- (25) 宮内公文書館蔵「外賓接待録三 明治三十九年」（識別番号76793）

- (26) 前掲『ミッドフォード日本日記』四一頁。

- (27) 宮内公文書館蔵「外賓参内録 明治三十九年」（識別番号1952-1）

- (28) 扇子忠監修『皇室のボンボニール』（阿部出版、二〇一九）に明治三十九年二月二十日英国コンノート公アーサー殿下歓迎宴会のボンボニールとして「隅切り唐櫃形 バラ・菊文ボンボニール」が掲載されているが、同品には「尚美堂 純銀製」との刻印があると記されている。一概には言えないが業者名を刻印するのは大正期以降が多く、また皇室主催のボンボニールには天皇家紋が付く場合が多いため、このボンボニールは当日のものとは考えにくい。

- (29) 学習院女子中・高等科蔵。

- (30) 『日本大百科全書』ジャパンナレッジ 紋章項参照。

- (31) 前掲「宮中晩餐会の歴史的考察その（二）―明治三十二年大日本帝国憲法発布式の諸様相―」二七頁。

- (32) 『明治天皇紀』巻一二 明治四十五年三月二三日条 七五三頁。

- (33) 宮内公文書館蔵「日記 明治三十九年 皇后職」（識別番号24720）

- (34) 明治十九年九月二十日にイギリス皇太子プリンス・オブ・ウェールズに菊花章が贈られているが（刑部芳則「明治の勲章儀礼」『明治

聖徳記念学会紀要」(復刊五四号)二〇〇九、一四八頁)、その際の返礼品とは考えにくい。

(35) 『明治天皇紀』巻七 明治三十二年十月三十一日条 四〇一頁。

(36) 港区立郷土歴史館・宮内庁宮内公文書館共催特別展『港区と皇室の近代』図録」二〇二〇、六三頁。

(37) 「香川家史料」9920

(38) 『明治天皇紀』巻九 明治二十九年一月二十八日条 一三頁。

(39) 宮内庁HP 組織・所掌事務 - 宮内庁 (kunaicho.go.jp)「侍従職侍従長の統括の下に、侍従次長・侍従・女官長・女官・侍医長・侍医などの職員が、天皇皇后両陛下・敬宮殿下の直接お身近のことを担当し、御璽・国璽を保管しています」令和五年(二〇二三)一月一日閲覧。

(40) 『職員録』印刷局。国会図書館デジタルコレクション。

(41) 『明治天皇紀』巻九 明治二十九年五月六日条 六五頁。

(42) 『明治天皇紀』巻九 明治二十九年一月二十四日条 一三頁。

(43) 安在邦夫・望月雅士編『佐々木高行日記―かざしの桜』北泉社、二〇〇三、八五頁。

(44) 注(41)に同じ。

(45) 下田歌子が欧州視察を経て提出した内親王の教育に関する意見については「歌子の意見可なり、之れを採用せんとす」、「汝の上りし皇女教育意見書は悉く採用せられたる」とされたが、この意見書は「長崎省吾関係文書」1457と思われる。

(46) 明治三十一年は『職員録』の刊行なし。

(47) 『明治天皇紀』巻一一 明治三十九年三月 五一八頁。

(48) 『明治天皇紀』巻一一 明治三十九年一月十日条 四五四頁。

(49) 『明治天皇紀』巻一一 明治四十二年四月二三日条 二一九頁。

(50) 「長崎省吾関係文書」438-9、470-1

(51) 「長崎省吾関係文書」311、312、313より抜粋

(52) 前掲「宮中晩餐会の歴史的考察その(四)―明治三十三年皇太子結婚

から見る西欧化―」二〇頁。

(53) 学習院大学史料館編『写真集 明治の記憶』(吉川弘文館、二〇〇六)九七頁。

(54) 宮内公文書館蔵「用度録六 明治四十二年 御慶事二」(識別番号839-6)

(55) 註54に同じ。

(56) 以下購入先の英語名・フランス語名は宮内公文書館蔵「臨時費周宮御婚儀費(式典費)三 明治四十二年」(識別番号20261-3)を参照した。

(57) 前掲「昭憲皇太后の大礼服と洋装品の購入―香川家及び皇后宮職の関係史料から―」一〇一八頁参照。

(58) 『明治一五〇年記念 華ひらく皇室文化―明治宮廷を彩る技と美―』(青幻社、二〇一八)一〇三頁。

(59) 明治四十二年四月一六日付東京朝日新聞。

(60) 宮内公文書館蔵「重要雑録二 明治四十二年」(識別番号24764-2)

(61) 「香川家史料」22176

(62) 高輪御料地の歴史と北白川宮邸については長佐古真也・長佐古美奈子「北白川宮家および北白川宮邸関連遺構について」(東京都埋蔵文化財センター『港区高輪南町遺跡―東京都市計画道路事業幹線街路環状第4号線整備に伴う旧衆議院高輪議員宿舍跡地埋蔵文化財発掘調査―』東京都埋蔵文化財センター調査報告第367集、二〇二二)三七六頁に詳しい。

(63) 「香川家史料」18106

(64) 宮内公文書館蔵「臨時費周宮御婚儀費(式典費)四 明治四十二年」(識別番号20261-4)

(65) 東京會館ヒストリー ヒストリー―東京會館 (kaikan.co.jp) 令和五年二月二十九日閲覧

(66) 前掲「宮中晩餐会の歴史的考察その(一)―現在に続くイギリス風の導入―」三五頁。

(67) 明治三十三年の皇太子成婚の際には新宿植物御苑で栽培された花が使

用され「食卓上用花ハ御苑ノ分使用ノ見込ニ付代価ヲ要セズ」であった。前掲「宮中晩餐会の歴史的考察その（四）——明治三三年皇太子結婚から見る西欧化——」二五頁。

（68） 個人蔵

（69） 宮内公文書館蔵「皇太子並同妃両殿下御服御調度類図四 明治度

皇太子殿下御婚儀御調度具」（識別番号8344）

（70） 宮内公文書館蔵「御用度録六 明治四二年 御慶事2」（識別番号839-6）

（71） 宮内公文書館蔵「御用度録五 明治四二年 御慶事1」（識別番号839-5）

（72） 個人蔵

（73） この頃より鴨胤接待が行われるようになる（宮内公文書館蔵「外賓接待録二 明治三八年」（識別番号7667-2）。

（74） 現在でも「御世話になったので」という意図で皇族よりボンボニエールが下賜されることがあると聞く。その際のボンボニエールは言わば「作り置き」されたもので、ご慶事にデザインを決めて発注したのではないと言う。

（75） 「長崎省吾関係文書」468

（76） 『明治天皇紀』巻二二 明治四二年三月一九日条 二五頁。

（77） 「『日本酒で乾杯』両陛下発案のおもてなし」（日テレニュース 令和五年二年一六日配信）